

令和3年度第2次さっぽろ都市農業ビジョン推進懇話会会議録

札幌市経済観光局農政部

開催概要

- 開催形態 書面開催（新型コロナウイルス感染症の影響により、書面開催）
- 会議期間 令和4年（2022年）2月8日（火）から2月21日（月）まで
- 議 題
 - 1 中間評価について
 - 2 第3次さっぽろ都市農業ビジョンの策定
 - 3 令和3年度さっぽろ都市農業ビジョンの進捗状況
（会議内容は次頁参照）
- 出席者 第2次さっぽろ都市農業ビジョン推進懇話会委員 9名
- 配布資料
 - ・意見書（様式）
 - ・資料1 【議題1】 中間評価について
 - ・資料2 【議題2】 第3次さっぽろ都市農業ビジョンの策定
 - ・資料3 【議題3】 令和3年度さっぽろ都市農業ビジョンの進捗状況
- 参考資料
 - 1 第2次さっぽろ都市農業ビジョン推進懇話会委員名簿（第2期）
 - 2 第2次さっぽろ都市農業ビジョン推進懇話会設置要綱

会議内容

議題 1) 中間評価について

○市

基本的な方向Ⅲ「市民の農業に対する理解促進」は、さっぽろの農業振興に欠かせないものですが、前期においては目標が達成できませんでした。そこで、既存の取組を「もっとこうしたらよい」という改善策や、他市の事例等から新たにこんな取組をしたらよいというアイデアなどがありましたら、お聞かせください。

<サッポロさとらんど>

●委員

各指標において評価が芳しくない中で、とくに顕著なのが「さとらんど」の入園者数です。コロナ感染の影響が大きいことは理解できますが、感染対策を意識した人混みを避ける活動では公園などで過ごすことが奨励されたこともありましたが、「さとらんど」の入園者は増加しなかったのではないかと推察されます。レストランや売店の閉店など様々な要因も重なった結果であるとしても、根本的に「さとらんど」の存在意義、魅力が札幌市民に周知されていないとの指摘は否定できないと考えます。あらためて「さとらんど」の存在意義を明確にし、有効活用を検討することが重要ではないでしょうか。他の課題にも通じることですが、とくに生産者と消費者が交流できる拠点として、「さとらんど」は今後も札幌農業にとって意義深いものと考えます。

○市

サッポロさとらんどについては、ご指摘のとおり、その存在意義を明確にし、魅力を市民に発信していくことが重要と考え、令和2年度から施設の更新や魅力向上策に取り組んでいます。さとらんどが生産者と消費者が交流できる拠点としての役割を発揮し、市民の農業に対する理解を深めることができるよう、取組を継続していきます。

<情報発信>

●委員

新型コロナウイルス感染拡大を受けて、体験活動・交流機会の創出、食農教育推進等の実施方法も検討が必要と思われます。いまは小中高でもオンライン学習のインフラ整備が進みましたので、市内農場での農作業風景やさとらんど等での取り組みを映像コンテンツとして配信することも同時展開し、コロナ禍でも継続可能な「理解増進」の仕組み作りをしていくべきだと考えます。そのために、今後のビジョン策定においては、「ポスト・コロナに向けて」もしくは「ウィズ・コロナ」等の文言を入れ込んでいくこともご検討頂きたい。

都市農業の優位性を活かした多様な担い手対策は重要ですが、それとともに、園芸産地として雇用労働力対策を明確に分けて支援していく必要もあるかと思えます。石狩市のグリーン・サポーター制度（石狩市農業総合支援センター）のように、農業で気軽に働く機会をつくり、経営支援と市民の理解増進を同時的に進める試みも展開できたらと思います。

●委員

「市民の農業に対する理解促進」は大きなテーマであり、時間がかかることと思います。コロナ禍、活動に制限がある中、目標達成が厳しい項目がありますが、引き続き行政、JA歩調を合わせ、ともに事業を推進いただきたいと思います。

また、消費者や次代を担う世代に対して、SNSやPR動画等を活用し、農業の現状や食の大切さについて理解を深めていただくも有効と考えます。

●委員

農業の魅力を画像や動画で伝えてはどうか。

●委員

コロナ禍以前には、秋の収穫時期には、大通公園にて「さっぽろオータムフェア」、札幌駅前及び、札幌駅直結の地下通路での「札幌産新鮮野菜の販売」など市民にとっての楽しみがありました。が、今は、全てにおいて寂しい限りです。

一日も早く、コロナが治まり、従来のように多くの札幌市民の方々に札幌市の農産物への情報提供ができる日が来ることを願っております。

●委員

私、個人の活動としては、一昨年のコロナの非常事態宣言の4月末くらいから、時間を見つけて数件の生産者の仕事の手伝いをしながら、直接生産者の話を聞いてきました。

ラジオで生産者の様子を紹介したり、「Yahoo! JAPAN」の地域ライターもしているので、その中で直売所やマルシェ、役所の一部の食堂での札幌大球料理などの紹介もしてきました。

理解をしてもらうためには、「発信」がとても大事です。私が、7年前から約4年かけてブランディングした、「なよろ星空雪見法蓮草」という寒締めホウレンソウがあります。「かんだファーム」(https://www.kamikawa.pref.hokkaido.lg.jp/ss/srk/139_farmkanda.html)

1件からのスタートでしたが、今は5件の生産者が作っています。先日も「あぐり王国」に2回目の登場をしていますが、私の勧めで、日本野菜ソムリエ協会の「野菜ソムリエサミット」に出て、最高金賞を受賞しています。

今、私がこの話を出したのは、私がこの生産者のブランディングにかかわることになってからはフェイスブックでこの長いネーミングの「星空雪見法蓮草」を毎回連呼して書いたり、料理の写真を見せたり、生産者のさまざまな面を見せていったこと、それによって多くの人に見てもらい、多くの飲食店でも使うようになったり、そして多くの取材を受けたり…。出会った時は、売れないで困っていた野菜でしたが、私たちの熱意で、今やこのネーミングも結構覚えられるようになったと自負しています。4年ほど前からは札幌の百貨店や「どさんこプラザ」などでも販売されています。

発信は本当に大事です。

『こんな近くに 札幌農業』の取材が縁で、一昨年からは「かわいふぁ〜む」にもお邪魔し、作業し、直売所をPRしたりしていますが、川合さん本人もフェイスブックなどでいろいろ発信しています。わかりづらい場所にある直売所ですが、新規のお客様が増えていると聞いています。ただ、コロナ禍でマルシェの数が減っているのです。販路はとても困っていました。

細貝さんは、どこのマルシェでも人気があります。SNSはやっていませんが、出るチャンスがあればいろいろなマルシェ等に出ています。“赤い帽子”がトレードマークで、それも覚えてもらうためには大事なアイテムで、チカホでも目立ちます。スーパーにない野菜を多く栽培しているのも目を惹きますし、食べ方などのトークも上手なのも人気の秘訣です。

個人個人で頑張っている生産者さんはたくさんいます。ただ、発信する時間がないのも現実です。これらの情報が五月雨式に発信されると、目を惹き、素晴らしい情報になります。今はホームページの時代ではない。ホームページはそこまでとり着かなければその情報には行きあたらない。SNSは、最初は見る人が少なくても、誰かがシェアしたりコメントしたりして広がっていきます。

私であれば、ほぼ毎日、札幌の生産者さんの情報や畑の様子等々の発信をフェイスブックやインスタでアップしてもいいと思っています。

○市

ご指摘のとおり、市では情報発信の取組が遅れておりますが、サッポロさとらんどではSNSで情報を発信しているほか、令和3年9月には「オンラインさとの収穫祭2021」を初のオンライン形式で開催しました。農政部においても、農政だより「北の大地」のリニューアルや市民農業講座「さっぽろ農学校」のSNSでの情報発信など、少しずつ取組を増やしているところです。

今後さらに、データを収集、蓄積するとともに情報発信の取組を進めていきます。また、市民向けイベントなどの情報発信時、委員にもご協力いただければ幸いです。

議題2) 第3次さっぽろ都市農業ビジョンの策定

○市

第3次ビジョンでは、市街化区域にある農地も含めた農業振興の方針や取組を検討していく予定です。市街化区域の農地の活用や保全についてアイデアやお考えがありましたら、お聞かせください。

●委員

札幌の農業の発展的持続性を担保するには、生産者に対する直接的、間接的支援が必要であることは勿論ですが、生産物の安定した出口（消費者による購入）を確固としたものにするための仕組み作りも不可欠と考えます。様々な有効な方策が考えられますが、とくに札幌市という環境特性を踏まえると、「朝市」「マルシェ」「畑のレストラン」のような生産者と消費者の交流事業、活動が展開する、しかも生産者が負担にならずモチベーション向上につながるような民間を含めた体制づくりの検討を進めることが大切と考えます。

●委員

基本方針に賛成です。市街化区域も含め、地区ごとの農業の特徴・役割を明確化していく上でも、北区丘珠のたまねぎ（札幌黄）だけではなく、手稲区のカボチャ・スイカ、南区の果樹生産など、

特産品の生産状況、生産者の経営状況など区域ごとの農業の歴史・農業生産の現状を細分化して示していくような資料・データの蓄積・公表を進めて頂きたい。

●委員

「市街化区域の農地の活用や保全」は、農業振興上の主たる区域ではありませんが、農産物の生産や、緑地保全も含めた多面的利用が必要と考えます。

●委員

家庭菜園をしている人や農家に向けて講習会、講演会を開いて交流や情報交換できる場を増やしてはどうか。

●委員

全国的に見ても、農業従事者の高齢化に伴い、廃業・宅地化していくことは、かつて、「札幌農業応援団」事業を共催し札幌市内各地区を、札幌市民と共に見学及び収穫体験させていただいた身としては、大変残念な気持ちでいっぱいです。

最近、若い新規農業従事者も若干みられるとの報告を受け、大変期待しております。

今後とも、札幌市として大いに情報発信していただければと思います。

●委員

地方に行くと農家レストランがあり、レストランやカフェのすぐ横に畑があり、それも人々を惹き付け、メニューに花を添えます。生産者が生産だけでなく、飲食店経営もすることは難しいですが、飲食店との連携をすることは考えられるのではないかと思います。そういうマッチングもステキだなと思いました。

○市

大消費地である札幌市において市民が農業への理解を深めることは、農業者を支える上でもとても重要です。特に、市街化区域の農地は市民の生活により近く、重要な場であると考えられることから、市街化区域も含めた市内全体の農地の活用や保全について検討を進めていきます。

議題3) 令和3年度第2次さっぽろ都市農業ビジョンの進捗状況

○市

さっぽろの農業振興について参考とさせていただきますので、後期の取組や第3次ビジョン策定、懇話会等、ビジョンの全般についてご意見がありましたら、お聞かせください。

<ビジョンの指標について>

●委員

各指標の評価が、具体的にどのような具体的施策が展開されたか、それを反映する評価とな

っているか、という点を今一度確認して頂きたいと感じました。

例えば「意欲ある多様な担い手を増やす」ために何を実施したか、この指標でそれを測ることができるのか、「市民に信頼される持続可能なさっぽろ農業」の目標達成に向けて生産者の取り組みが指標となっていますが、消費者の評価がなく、信頼されることにつながっているか、指標としての妥当性を検証する必要性はないでしょうか。また、「土壌診断の実施数を増やす」ことは「農産物の安全・安心向上」とどのように関係するか疑問です。なお、私はⅡ(2)「地区ごとの農業の個性を生かす」、この方向が極めて需要と考えています。繰り返しになりますが、生産者の負担に配慮し、効果的な市民との交流できる仕組みづくりが、長い目で見た時に「さっぽろ都市農業」支えることになると思います。

また、Ⅲにおける「さとらんどを利用した人の満足度」の調査結果は、入園者数と関連していませんので、調査方法自体を見直す必要があると考えます。

●委員

「理解促進」とひとくくりでできないのだと思います。目標数字は大事ですが、達成とか、達成していないということではなく、何かその根底に潜むものを見つける必要があるかと。

基本理念の基本的な方向Ⅱの中の「さっぽろとれたてっこ認証農業数」は方向Ⅱの一部であって、農業経営の安定強化との違和感があるような気がします。基本的な方向Ⅰと、「さっぽろとれたてっこ認証」部分を抜いた基本的な方向Ⅱと一緒に考えた方がいいと思いました。今となっては、産地表示制度が変わってしまっているのです。

○市

ビジョンの目的と指標については、中間評価報告においてできる範囲内で見直しましたが、ビジョンそのものの見直しではなかったため、最適な指標となっているとは言えない部分もあります。これらの反省を整理し、次のビジョンの策定へつなげていきたいと考えます。

<その他の取組>

●委員

2020年センサスが公表されるタイミングですし、統計資料をもっと活用し、ビジョンと同時に参考資料を充実させて、札幌市農業の「見える化」を進めていきたい。

●委員

有害鳥獣被害防止については、電気牧柵導入等に補助いただいておりますが、被害防止のための大きな仕組づくりが急務でありますので、引き続きご検討願います。

今後もさっぽろ都市農業ビジョンや人農地プランを基に、JAとともに農業振興に取り組んでいただきたいと強く思います。

●委員

JAやその他団体との交流を増やし、一緒に活動する機会を増やして活発にしてはどうか。

●委員

「さっぽろとれたってこ」の立ち上げ時から、消費者の一人として関わってきた私としては、今後も認知度を上げるためには、大いにPRするとともに、三越デパートでの販売に限らず、駅方面のデパートまたは、地下歩道空間での販売及びPRをしていただきたいと思います。

●委員

ポイントは「サッポロさとらんど」にかかっていると言っても過言ではないと思います。

4～5年前に新潟の「いくとびあ食花（しょくはな）」(<http://www.ikutopia.com/>)を視察したことがあります。「いくとびあ食花」は、都市と田園地帯が交わる鳥屋野潟（とやのがた）のほとりに位置し、美しい風景や野鳥などの生き物を間近に観ることもできる憩いのスポットです。新潟市が誇る食と花をメインテーマに、子どもから大人まで様々な体験と交流ができる施設がそろっています。切り口は食育と花育ですが、“自分で考え、行動していく「自ら生きる力」を伸ばす”本来の食育の考えの『「食育」とは、様々な経験を通じて、「食」に関する知識と、バランスの良い「食」を選択する力を身に付け、健全な食生活を実践できる力を育むこと』と似ています。

私は、以前にもお話したと思いますが、「都市と農業をつなぐ田園テーマパーク」というキャッチフレーズが今の時代に沿えていないような気がしています。そこに今の人たち（市民だけでなく、関係者も）が体を合わせようとしているという無理があるのではないかと。Sサイズの服をLサイズの人が着ようとしているようなイメージです。今、そのフレーズをやめてしまおうという提案はありません。

農業というよりも「食べ物」という言葉から入った方が、多くの人に受け入れやすいのではないかとということです。そういう意味では新潟の施設は入口が入りやすい。「食」の向こう側にはそれを作る人がいる。そちらから情報提供をするのではなく、もう少し「食」寄りから情報提供してはどうかということです。「いくとびあ」にも体験農園があります。

個人的には、これから市民農園利用者が増えるようには思えません。高齢になると車を手放す人が増えたり、もう少しちゃんと農業をしたければ他市町村の移住を考える若い人も増えています。

体験農園の場合は、少しハードルが低い。そして、私は札幌という都市だからこそ、「生産者を支える市民」がいてもいいと思います。それをコーディネートする人がいたら、行きたいという人は私の周りにもいます（私もコロナ禍で「札幌農耕接触倶楽部」とSNSでお手伝いをしている様子を発信していますが、参加したいという人も少しずつですが増えています）。

近隣のJAでは仕事として、生産者のマッチングをしています（派遣業のあるJA）。仕事ではなくボランティアとして札幌の生産者を支えるという形ができるといいなと。

個人的な夢ですが、2030年の冬季オリンピックが札幌で行われるとしたら、すべてを札幌の野菜でおもてなししたいと思っています。雪室を使って、夏場の野菜を保存するなどして。そんな夢もあります。

○市

市民に信頼される持続可能なさっぽろ農業の実現に向け、市民の農業への理解を深める取組が重要であり、その取組について様々なご意見をいただきました。次のビジョン策定を見据えて、既存の取組だけでなく、情報発信や農業者のサポート、市民との交流等に取り組んでいき

ます。

<懇話会>

●委員

ZOOMでのオンライン開催も実施してみませんか？

○市

世間では「オンライン」が会議の手法として普及し、重要なものとなりましたが、事務局側の実施体制が整わず、令和3年度は実施することができませんでした。実施に向けて、検討していきます。